

小林辰也さん

芸能のプロが、 自治会の文化部長に。

日高団地の中央通りに「演歌アコーディン工房」というお店があるのをご存じですか。主は小林辰也さんで、ティチクレコードの演歌歌手として活躍されていた方です。レコードプロデューサーに転身し、東芝EMIでは、村田英雄さん、及川三千代さん、志賀勝さんほかを担当。日本作曲家協会の会員であり、今も芸能界とひろくつながりを保っています。出身は民謡が盛んな岩手県八幡平市。歌い手というだけでなく、尺八や津軽三味線、アコーディンの演じ手でもあります。

現在は川越市在住ですが、長らく日高団地近隣で暮らしたこと也有ったそうで、地域では演歌や民謡の指導をしていましたから、顔見知りという方もいらっしゃるのではないでしょうか。

「都会でいるよりも、のんびりとした風景がひろがる場所の方が性に合っている。東北の出身だからね」という小林さん。全国で5人ほどしかいなくなったというアコーディオンの修理工房をこの場所で営んでいます。

そんな多彩な技を持つ小林さんが、今年度より日高団地自治会の文化部長を担当することになりました。新設となった自治会館のこけら落としに、演歌歌手の扇よう子さんを招くなど、さっそく地域の文化面に貢献。芸能文化に関してはプロですから、これからどんなことを仕掛けていただけるのか、活躍が期待されます。

■ 演歌アコーディン工房 / 日高市 東高萩 2-20-1



「演歌アコーディン工房」があるのは、みどりやさんの近く。アコーディオンの懐かしい音色が聞こえてくることもあります。



1台100万円以上するアコーディオンもあるそうです。



ツーショットの写真は、岡千秋さんと。音楽関係の仲間です。



アコーディオンを分解しての調律作業中。

住めバ日高



日高団地は、高度成長期に市内で最初にできたニュータウン。高速道路 IC や幹線道路からも近く、利便性に優れていますが、大型ショッピングセンターが近隣にオープンし、活気にあふれていた商店街は、おとなとこどもが平和に暮らす、静かなまちになりました。



住めバ日高

日高市の東端にある日高団地。高度成長期から平成にかけて働き盛りだった人々が便利に暮らしたこのまちが気になっていました。そんな時、住民による居場所づくりのプランを知り、当紙発行を思い付きました。取材の手伝いや、情報・写真を提供してくれる仲間を求めます。特に若い人、歓迎です。



発行：いしいデザイン(飯能市岩渕644-1)
取材執筆：いしいデザイン
デザイン：黒田デザイン事務所
写真協力：代政雄
印刷協力：株式会社ブラウズ(文化新聞)
配布協力：日高団地自治会
お問い合わせ 090-2663-2412
m330d625@yahoo.co.jp
創刊号 2022年5月

春の散歩道 / 写真提供：代政雄(日高市高萩東)

ASA日高 こどな食堂

春の一日、日高団地が和んでいました。



閑静過ぎる住宅街

市内で最初にできたニュータウン日高団地。同住民はこのまちをベースに存分に働き、子育てをし、一様に年齢を重ねました。そして、訪れたのが少子高齢化という現実。にぎやかだった商店街は店じまいする店舗が増え、閑静な住宅街も空き家が目立ち始めています。

取材したASA日高は、そんなまちの一角にある新聞販売店。現店主である中村八男さんのお父さまが18年ほど前に開設した店で、中村さん曰く、当時の商店街は、本屋、肉屋、魚屋、米屋、スーパー、コンビニなどの多様な店があり、たいがいの生活必需品は歩いて買いに行くことができたと言います。

その後、中村さんは新聞販売店経営の勉強で実家を離れます。8年ほど他県で暮らし、3年ほど前に戻ってきたのですが、配達で家々を巡ると、草ボ



140食分を用意しました。ケンタッキーのお肉を使ったチキン煮込みカレー、サラダは好評です。



お弁当がもらえるし、散歩しながらここまで来るのが楽しいという仲良し兄妹。少しして友だちも合流したよ。

コロナ禍で、人々が集うことができない環境のなか、地域食堂の活動は、自粛を余儀なくされる状況にありました。

「こどな食堂」は、人と人の関係が薄くなりつつあったそんな時期だからこそ、始められたのです。

食堂がオープンするのは毎月第2日曜日。現在はお弁当を手渡しする形式になっていて、早い人は開店の1時間ほど前から並び始め、順番を待つ間に小さな交流の場がつくれられます。その日は地元の演奏家が場を盛り上げてくれていて、和やかな時間が流れていきました。



1番乗りのお三人。コロナで出かけられるところがないので、こうした機会があるのはうれしい。毎回楽しみにしているそうです。

ボーグの空き家(様子が変だと感じた時は、地域包括支援センターにつなげます)や「売却」の札が出ている住居を度々目にするようになったそうです。

「長年購読くださっていたお客様が、急に解約することもあります。ここが仕事のフィールドなるのですから、活気を取り戻したいと考えるようになりました」

コロナ禍だからこそ

深刻さを感じたのは、新型コロナウイルスの影響が長引き始めてから。お年寄りなどの弱い立場の人々に影響が及ぶようになり、お困りごとを耳にする機会が増えたのだそうです。

そこで始めたのが、月1回の地域食堂です。特徴は、おとなもこどもも誰もが楽しく利用できる場所とすること。「こどな食堂」のネーミングは、そうした思いが込められています。

一番したいのは勉強だと教えてもらいました。僕としては、このことがものすごくショックで、自分の場合、遊びに夢中で勉強をしたいなどとは思いませんでした。勉強をしたい子どもかあ… 何故だかわからないけど、それを聞いて寂しい気持ちになったんです。いずれは学習支援スペースや子どもの遊び場を作りたいと思っています」

こうした抱負を伝えてくれた中村さん。若くしてすごく頑張っています。昭和の時代から地域を担ってきた先輩勢も、負けてはいられないのでは…。行動力のある彼を年配者が後押しするような雰囲気が形作られていくと、面白いまちなみそうですね。

子どもの居場所づくりも

さて、中村さんが今後やりたいこととしては、「『こどな食堂』を長く続け、定着させること。」だそうです。それから、これは夢の一つでもあるそうなのです、地域に子どもの居場所をつくりたいと言います。

「社会福祉協議会の方に、貧困家庭の子どもが



日高こどな食堂
毎月第2日曜日 12時からなくなるまで
料金 こども50円 おとな200円
お問合せ 090-7288-5398

中村八男さん&ボランティアメンバー(+演奏家の二人)。終了後に集まってもらい、集合写真を撮りました。地域の皆さんがこんなに喜んでくれるなら、やりがいがありますね。